

令和7年度第3次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. この問題冊子は、表紙を除いて3枚である。もし不備の場合は、直ちに申し出ること。
4. 解答用紙は1枚である。所定欄に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
5. 下書用紙は、2枚である。
6. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 次の文章を読んで、「協働学習」について内容を要約しなさい。これを踏まえて、教え手が協働学習を成功に導くためには、授業にどのような創意工夫を取り入れたらよいと思うか、あなたの考えを理由とともに述べなさい。（横書き 八〇〇字以内）

協働学習に参加する

小学校や中学校では、グループで情報を共有したり議論をしたりしながら学ぶ、協働学習の場が急速に増えています。

協働学習とは、グループを作ってお互いに議論をしたり協力し合ったりしながら学ぶ、近年急速に普及している教育方法ですが、現在の学習指導要領に謳われている「対話的な学び」の考え方にも合致しており、ますます広がっています。

明治期以降の日本の近代教育では、先生が教壇から大勢の児童、生徒、学生に授業をするのが当たり前で、学び手同士が対話をしながら議論を通して新しい見方を産み出していくような、協働学習のタイプの授業が日本全国の公教育で本格的に行われるようになったのは、明治以来初めてのことといってもよいでしょう。

ただ、協働学習を導入した授業が増えているといっても、協働学習によってどんな知識やスキルが身につくことを教え手と学び手が期待しているのか、定かでないケースもあるのではないのでしょうか。もちろん授業の内容や学年などにもありますが、協働学習は、科目の内容を学ぶだけでなく、観察力、チームワーク力、メタ認知力、並行処理力、臨機応変力など、多様な能力を伸ばし、鍛錬する場であると考えるべきです。

一人の教員と多数の児童、生徒、学生のような一对多の授業に比べ、協働学習の場では、学び手は他の学び手が何を考え、何を言おうとしているのか、グループ全体の議論がどのように進行していて、焦点が当たっている論点は何なのか、その他、自分も含めて学び手の心のはたらきに気を配る必要があります。そのためには、他の学び手の表情やジェスチャー、対話の内容や勢い、自分と他の学び手の心のはたらきの間のインタラクションやその変化などに注意していなければなりません。このため、もちろん社会的なインタラクションの発達のしかたの違い、内向的な児童、生徒への対応など、別の課題はありますが、基本的には他の学び手の心を感じる共感のはたらきが養われると考えられます。

また、グループの議論を建設的に進め、なるべく合意を取っていくことが大事ですから、「チームワーク力」も磨かれることになります。

他の学び手から言われたことで自分が何を考えていたか、気がつかなかった自分の心に気づくこともあります。むしろ、こうした気づきのスキル、つまり自分の心のはたらきを認知する「メタ認知力」は、教え手と学び手が一对多の教育ではなかなか鍛えられません。協働学習はメタ認知力を養うための場にもなり得ます。

（次のページに続く）

何かをしながら並行して別のことをする力、つまり「並行処理力」を鍛えるにも、協働学習は適しています。物事に集中することは大切で、古典を熟読したり、スポーツの練習に熱中するときには、他のことを並行して考えたり行ったりすることは困難です。教育現場ではむしろ、子どもの集中力を高めるのに苦慮していることも多いでしょう。しかし、その一方で、日常生活や仕事の場では、むしろ並行処理をしていることのほうが普通です。誰かと話をしながら別の用件を済ませることなど、実は多くの人がやっていることで、複雑な社会的インタラクションのなかで生きていくためには、むしろ不可欠なスキルなのです。

このスキルを鍛錬するには、協働学習の場はとても適しています。いろいろな議論が錯綜する中で、共通の話題に注意を集中しつつ上手に並行処理をして議論をまとめていくスキルは、むしろその後の人生に必要なスキルになります。

また、教え手一人対学び手多数の教室場面と違い、協働学習の場では、時間が限られている中で議論をまとめようと思っても、誰かがまったく違うことを言い出したり、思ってもいなかった状況に陥ったりすることが、よくあります。こういうときに臨機応変に対応する力もまた、その後の人生に役立つ、きわめて重要な力になります。この「臨機応変力」を知らず知らずのうちに学び、鍛えるにも、協働学習は絶好の場になります。

右に述べたように、協働学習はいろいろな力を鍛えてくれる優れた学習方法ですが、弱点もあります。特に、従来から言われている弱点として、さきほども触れたように、グループを仕切る能力のある学び手がいつもリーダーになってしまう可能性が高いこと、議論に入っていけない児童、生徒、学生が多く出てしまう可能性があることなどが挙げられます。

これらの弱点を乗り越えるには、教え手の側が、協働学習の長所と弱点を熟知し、協働学習によってそれぞれの学び手がどんな能力を伸ばせるかを上手に予測していく必要があります。また、学び手それぞれの学びの意欲や得意不得意、他の学び手との相性などを考慮しながら、グループの構成メンバーをうまく変えたり、評価をうまく学び手にフィードバックしたりすることも大切です。

協働学習によって磨かれ得る能力には、さきに述べたようにいろいろな能力がありますが、なかでも、一人での学びや一对多での学びに比べて協働学習の場はメタ認知力を身につけるのに適しています。メタ認知力は、情報を鵜呑みにしない力、自分の得意、不得意を理解する力などの基礎になるものでもあります。

右に述べてきたような意味で、協働学習は「教育の未来」に重要な位置を占めるようになると考えられますが、気になる点があります。それは、小中学校に比べ、高校では協働学習の導入が進んでいないと考えられることです。発達の過程から見ても、高校こそ「主体的な学び」、いわゆる「アクティブ・ラーニング」のスキルをしっかり身につけるべき場なのですが、アクティブ・ラーニングの体験を繰り返す絶好の機会と考えられる協働学習の場は、小中学校に比べると高校の授業にはあまり取り入れられていないのではないのでしょうか。

（次のページに続く）

そうだとすると、理由として考えられるのは、十代半ばから後半というむしろ大人に近い年齢の高校生
の協働学習には、学習目標や期待される成果の設定のしかたなど、小中学生とは違った観点からの教授法
が求められること、歴史的にもともと高校は大学予科の位置にあって、(全国の高校の大半を占める普通高
校では) 高校教育は主として「対象の知識」を座学で教える場であったこと、伝統的な大学入試に協働学
習の体験はほとんど不要であったことなどです。

その一方で、高校における協働学習は「教育の未来」にとってきわめて重要な課題です。理由は簡単で、
高校時代こそ、共感する力、チームワーク力、メタ認知力、並行処理力、臨機応変力、その他、協働学習
が得意とする多様な能力の基礎を、現実の社会におけるインタラクションに近い水準で育むことのできる、
最も適切な時期にあたるからです。

もちろん、学校や教育委員会によっては、以前から高校の協働学習に力を入れてきたところがたくさん
あります。ディベートの授業を取り入れている高校もあります。他にも、協働学習の重要性を知る高校の
先生方によって、多くの努力が進められています。

ただ、日本の高等学校全体としては、少なくともこれまでは、高校レベルの本格的な協働学習の教授法
を開発して十分に普及させるような活気は見えませんでした。協働学習を導入しつつその教授法を開発し
ていくことを通して高校教育全般の水準を上げ、「教育の未来」を築く土台の一つにしていく必要があると
考えます。

協働学習は学びの目標を十分理解して活用すべきだということを、学び手と教え手の両側から述べてき
ました。学び手は、協働学習に参加するのはなぜなのか、協働学習で得られることは何なのか、どんな目
標をもって参加するのかを考えながら、積極的に参加することが大切です。教え手のほうは、学び手にこ
うした設問を投げかけて、学び手の主体的な参加を支援することが重要です。

(出典) 安西祐一郎『教育の未来 変革の世紀を生き抜くために』(中央公論新社、二〇二二年)(一部
改変)